

## 第 210 回 CERN 理事会メモ

2022 年 12 月 16 日 (木) 制限理事会

日本からの参加者：田島博樹 (Geneva 代表部)、岡田安弘 (KEK)

アジェンダ：<https://indico.cern.ch/event/1223290/>

日本は LHC プロジェクトに関するオブザーバーとして、制限理事会の LHC に関する議事に参加

### 制限理事会

#### 項目 2 4 LHC に関すること

M. Lamont 氏が加速器群の状況について説明した。年末の運転休止期間が 2 週間早くなったことにより、11 月 28 日の午前 6 時をもって今年の加速器運転は停止した。これまでのところ、LHC 入射器群の運転状況はきわめて順調である。SPS から North Area の物理実験のために、ほぼ能力の限界の強度で安定してビーム供給を行うことができた。LHC 加速器は 9 月に故障のため運転を停止した期間を除き、順調に運転を続けた。最終的には安定ビーム運転は 6 割を超えるところまでできた。ATLAS と CMS 実験にはそれぞれ  $40\text{fb}^{-1}$  の積分ルミノシティを供給した。2023 年は、3 月から加速器運転作業が再開され、10 月 30 日まで運転の予定である。CERN がエネルギー管理の認証 (ISO 50001) を受ける手続きが進んでいる。

J. Mnich 氏が LHC 実験とコンピューティングの現状報告をおこなった。LHC 4 実験

(ATLAS、CMS、ALICE、LHCb) については、2022 年は重イオン加速が延期されたため、短期間のテストを除いて、陽子衝突物理実験のみが実施された。各実験の年末の運転休止期間の作業予定と物理ハイライト、LHC 衝突点の超前方でニュートリノの相互作用を測定する小規模実験 SND@LHC の状況、HL-LHC に向けたコンピューティングの準備状況について説明された。次いで、出版物著者の問題について説明があった。2 月のロシアによるウクライナ侵攻後、LHC の 4 実験の論文の出版は事実上止まっている。論文の著者と所属機関の記述法について合意ができるまでは出版が進められないでいる。CERN のマネジメントとしては、4 実験が共通の方法をとることが重要であると判断している。4 実験のコラボレーションそれぞれで解決法を検討しているが、4 実験が同じ結論に達しているわけではないとの現状報告がなされ、この問題の解決のために、理事会へ支援が依頼された。発表後、Science Policy Committee および Finance Committee の議長がコメントを求められた。出版物著者の問題以外については特に問題は指摘されなかった。次いで理事長から、出版物著者の問題について、メンバー国の意見が求められた。様々な立場からの意見が表明され、また、この問題について今回、結論は出せないとの意見が複数の国から出されたため、引き続き理事会で議論することとなった。

文責：岡田